

岸本美緒著

明清交替と江南社會

— 17世紀中國の秩序問題 —

則松彰文

我が國の傳統ある中國史研究・明清史研究の「正統な」繼承者であると同時に、建設的方向での批判者の代表である岸本氏の作品群には、狭小な範圍に止まらぬ龐大な量の先行研究の消化吸収を基盤とした、斬新なアイデアの數々がちりばめられている。岸本氏ご自身は、それらのアイデアを氏の人柄そのままに、きわめて謙虚な言辭を以て提起されるが、披瀝された中身はまさに深い思索と問いかけの結晶として、時に大膽ともいえる迫力をもって提起されるのである。我々が岸本作品の讀後に、ある種の爽快さと充實感とを覚えるのは、明快な論旨や魅力的な文章によることは勿論、氏の學問的眞摯さに共鳴するからに他ならないであらう。俗的表現を許されるなら、「岸本ファン」を自認する評者にとって氏の著作を評する仕事は誠に光榮であるが、同時にまた、眼前に聳え立つ名峰の切り立った岩壁にロッククライミングを試みんとするが如き畏れを抱かせるものでもある。

大著『清代中國の物價と經濟變動』（研文出版、一九九七年）に次ぐ岸本氏の第二論文集となる本書は、氏自身が述べるように、ジャンルで言えば、經濟史ないし社會經濟史を扱った前者に對し、社會史の範疇に屬するものである。しかし、氏の全著作リストを作成

してみても更めて気づかされたことは、本書に結實する氏の問題關心はきわめて早期に生まれ、經濟史關連の論考とパラレルに本書收載の諸論考が發表されてきたという點である。兩著に通底する氏の問題關心は、「當時の人々がなぜそのような行動をとったのか、どのような狀況が人々をその方向に向けてつき動かしていったのか」（序i）という一點にある。歴史に對する岸本氏のかかる關心のありようそれ自體が、我が國におけるいわゆる「戰後歴史學」の批判的繼承ならびにアンチ・テーゼに、また世界的な歴史學の新潮流に連なっていると見ることができよう。従つて、本書が前著とともに有する明清史研究に對する新たな問題提起の書としての性格、また歴史學研究への新たな問いかけの書としての位置を我々はまず確認しておく必要があるであらう。

さて本拙評では、本書の内容紹介を必要最小限にとどめ、數點の問題に絞つて私見を述べさせていだいた。「問い直しの學」と言われる社會史そのままに、岸本氏によつて更めて問い直された問題の検討に多くの紙幅を割く必要性が認められるとともに、本書に對する書評が既刊未刊あわせて甚だ多く、そのため通常以上に、それぞれのもつ個性が肝要となると判斷したからである。

それではまず本書の内容紹介から始めることにしよう。

一

盛り澤山の論點とズシリと重い問題提起に溢れる本書にあって、やはり壓巻はその「序」である。ここでは各章において具體的に展開されることになる氏の問題關心の所在が明示されるのみならず、氏の『知的履歷書』が開示されつつ、その學問的スタンスが迫力を

もって披瀝される。地域社會論との共鳴、發展段階論・階級闘争史觀に對する違和感、社會學のアプローチとの親和性、社會不安と秩序形成への關心等々、ここに岸本史學の淵源と變遷とを垣間見ることができる。多岐に亙る論點のうち最も注目すべきは、「社會の片隅の行爲者」の「行動様式、選擇の論理、社會像」に關する「ミクロからのまた下からのアプローチ」による分析を通じて中國社會・明清時代へと肉迫する、その視座であろう。かかる視座は、本書のみならず岸本作品總體を貫流するものとなっている。何れにしても、岸本氏の「手の内」を大膽に明かした本「序」は、我々讀者に對する氏からの眞摯な問いかけと言えよう。

第一章「明末清初の地方社會と『世論』」は、江南松江府を對象に、本書の認識の出發點となる明末清初像が素描される。

十六世紀に生起した東アジア國際商業の發展と刺激——國際交易による銀流入と後期倭寇の侵入——により、明末の社會變動が生じ、城・鄉閭を往復する流動的でバラバラな群衆が生み出された。その結果、農村の狭く安定した生活範圍が崩壊し都市へ人口が流入するなど、人々は不安定な生存競争の世界へ放り出された。かかる社會狀況の中であって、自衛や社會的地位の上昇を目的に新たな人間關係が取り結ばれ、そのことが明末の鄉紳勢力増大や各種結社隆盛の一大契機となった。清朝は江南の崩壊した秩序の回復を、明末の開放的・流動的な社會構造を溫存した上に、皇帝への一元的・單極的支配のもとに統合することによって圖ろうとした、と。

第二章「明清時代の鄉紳」は、本書を代表する雄篇。「從來注目されてきた事實をあらためて解釋し、研究史上の膠着を解きはぐし、様々な事象を整合的に説明しうる全體的な圖柄を描いてみる」

(序ii) 本書の狙いを最もよく體現した一篇である。從來からの「難問」の一つであった中國における「國家と社會」問題の象徴として注目されてきた明清鄉紳に關する氏の見解は、次の如くである。

中國傳統國家の特色は、國家權力の強さ、民間勢力の強さという形では表わせず、局面によってどちらの様相をも示すという點にある。それは國家と社會の機能的同型性に基づくものであって、兩者には同型の秩序維持機能がある。よって、鄉紳の性格を國家・社會いづれかに歸着させる問いは意味をもたない。明末の地方社會の變容に伴うバラバラの個人が活潑に交渉し競争する流動的な社會の下で、諸個人の選擇により意志的に作られる人間結合の一つとして、人々と鄉紳との結合が果たされた。鄉紳の勢力基盤は、國家權力や經濟力等に歸して説明できるものではなく、むしろ人々がなぜ鄉紳につき従うかという方向から説明できる。すなわち「株式市場での投機」の如く、多くの人々の「有望株」鄉紳に對する共通認識と、鄉紳との結び付きを求めた結果(「投機」)とによって鄉紳は勢力を形成していく。かかる狀況は、同時期におけるイギリスのジュントリ、イスラム社會の地方名士層の如き名望家支配の成立にも通じる一面をもつ。

一九七〇年代に一世を風靡し、そして論争の歸趨も定まらぬまま多大な影響を残しつつも立ち消えた鄉紳論に、岸本氏が大きな見通しを與えた本章は、劃期的なものと評價される。しかし評者には、鄉紳勢力の基盤に關わる「株式市場での投機」説がどうもしっくりと來なかつたことも事實である。この點については、後に更めて言及したいと思う。

第三章「明末社會と陽明學」は、本書の基本的視座である混亂期・秩序解體期の明末を生きた「人々」の視點から、人々と陽明學との関わり、陽明學の特質を問うた意欲作。簡潔に内容を紹介することの甚だ難しい一篇だが、陽明學が「明末の混亂期に生きる人々の生活感覚・社會感覚をストレートに代辯するものであり、その性格が「明末に陽明學を流行させた強みでもあり、同時に清朝の秩序回復期にそれを衰退させた弱みでもあった」として、明末社會とのきわめて強い内在的連關を陽明學に求めた點が特筆に値する。尚、本章には「補論」として、溝口雄三氏の批判に對する反批判が掲載されており、これがまた岸本氏の陽明學理解を深める上で恰好の素材を提供してくれている。

第四章『五人』像の成立——明末民變と江南社會——、第五章「崇禎十七年の江南社會と北京情報」の二篇は、本書の表題となった明清交替という一大變動と江南社會の問題を扱った作品。第四章で取りあげられたテーマは、明末江南民變の代表的事例として豊富な研究蓄積をもつ「開讀の變」ではあるが、ここでは岸本氏の手によって、同一食材を使った異なる料理に仕上げられている。すなわち「開讀の變」そのものの検討ではなく、これに關わった「五人」のイメージがどのように形成され、それが後代の江南社會へどう傳わったかという一つの文化史研究に轉化された點に本章の眞價があると思われる。小説・戯曲・士大夫の認識等を素材として、歴史的イメージ形成の實例を示し、「虚像」に込められた當時のメッセージを読み解く手法は斬新である。

ただ一點、評者には些か氣になった點があるのだが、それは本章中に「江南士大夫社會」「紳士層」「紳士」「知識人」「名士層」

「名士」「文人」「官僚紳士」といった語が出てくることである。岸本氏のこと故、それぞれの文脈と史料等に照らして最適な名辭が選擇されたものと推測されるが、評者には些か混用との感が残った。

第五章は、本書中最もヴォリュームのある一篇で、李自成軍による北京陥落・崇禎帝自殺の情報の江南傳播（大運河を經由した傳播ルート、傳播の日時・日數と傳播手段）とそれに對する江南地方社會の諸々の反應をおった前半、李自成軍に投降した明官僚に對する「從逆」問題を詳細に檢證した後半とで構成される。首都の陥落、皇帝の自殺、清軍南下といった非日常的な一大變事の問題を扱いながら、これらに關わる江南社會の反應や世論・政治のあり方を明滅亡時ゆえの特殊事例としてではなく、明末中國社會に共通するものと捉えらるとともに、崇禎十七年の反「從逆」運動の事例はその典型例であると評價する。また平常時には官僚紳士の威信によつて抑えられていた地方社會の對立や紛争が、明滅亡と「從逆」情報に伴う彼らの威信の低下により一舉に顯在化したという指摘は、甚だ示唆に富む。

第六章「清初松江府社會と地方官たち」は、明清交替後の清初松江府における權勢の變化と清朝中央政府による江南地方吏治の肅清を扱った一篇。明末以來の紳士勢力の弱體化、彼らの官吏に對する地位の低下、科擧資格に對する官制上の地位重視の風潮、さらに文官に對する武官の地位上昇など、清初における新たな事態の出現が指摘される。また「江南奏銷案」に見られる清朝中央政府の江南統治の課題が、地方の半自立的勢力の成長を抑えることにあったという。本書のもつ魅力の一つに、引用史料の洒脱さ漂々輕妙な口語譯

があるが、本章においても、その妙味が有効に活かされている。

最終第七章『「歴年記」に見る清初地方社會の生活』は、本書の最後を飾るにふさわしい。岸本社會史の記念碑的作品である。一九八六年に本章の原型となる論文が發表されて以降、經濟史關係のものと並んで、氏の社會史的アプローチに基づく論考が陸續と發表されることとなった。本章で詳細に分析された清初上海の「市井の知識人」姚廷遴の著作『歴年記』は、本書全體を通じてしばしば引用されており、かかる點で本書における最重要史料の一、また岸本氏の明末清初理解のベースとなるものの一つと言える。

姚廷遴という一個人を核として、血緣關係を主とした彼をめぐる様々な人間關係、商業、農業經營、胥吏、家塾教師へと轉ずる彼の選擇的・打算的經濟生活の實態、彼個人が関わった訴訟事件と徵稅問題、等を丹念に描いた本章は、個別具體的な事例研究だけに読む者に飽くことなき興味を抱かせる。清初の江南社會を「一面では投機的利益を追うとともに一面では危険を回避しよう」と、「多様な可能性に二股も三股もかけ」て生きた姚に、ある種の人間的共感を覚えるのは、恐らく評者一人に限ったことではなからう。

以上、本書の簡単な内容紹介を行ない、あわせて若干のコメントを附した。もとより論點満載の本書の内容を簡潔に紹介することはそう容易いことではない。というより、むしろ無謀の形容がふさわしいかもしれない。恐らく重要な論點の遺漏や誤りを避け得ていないだらうと思う。この點、岸本氏ならびに讀者諸賢のご叱正をいただくこととし、以下には本書に對する若干の私見を提示することにしよう。

二

第一は、岸本郷紳論とくに郷紳の「威信の源泉」に關する問題についてである。氏の郷紳理解を深める上で、先に本誌上に掲載された、米國人研究者等による「中國地方エリート」研究に對する氏の書評が大いに參考になる。そこでここでは、右の書評を視野に納めつつ、あわせて明清郷紳との間に種々の共通項が看取れるイギリス・ジェントルマンの事例をも參照しながら論じることとしたい。

岸本氏の郷紳理解の特徴は、それを「當時の人々」の認知と合意、戰略と行爲の問題から解釋する點にある。すなわち、從來の理解の如く、科擧を媒介とする國家權力との繋りや大土地所有等に基づく經濟力に郷紳勢力の基盤を認めるのではなく——氏の言を借りると、「郷紳の屬性の側から解くのではなく」(五二頁)——、「人々」から支配力ある者として認知され、そのことによって「人々」が保護を求めて郷紳との間に人的關係を取り結ばうと行動する、そこに郷紳の勢力形成メカニズムを看取するのである。

「人々の視座」の戰略的意義について今は措くとして、氏は從來の郷紳理解のどこに問題があると認識しておられるのか。それは第一に、國家と社會の「分離」ないし「對抗」に關わって、「郷紳の性格を國家と社會とのいづれかに歸着させよう」と(四六頁)して論争が展開してきた點、第二に、なぜ明末十六世紀に郷紳が據頭し、かつそれがなぜ他の地方勢力(官衙、軍隊、種々の結社など)をも壓する力を持てたかという點で整合的な説明が爲されていない點、にあるという。第一の點については、氏の國家と社會の機能的同型性説によって説明できるとして、第二の點はいかがであらう

か。郷紳が明末期に初めて登場したわけではなく（從來から注目されてきた郷紳の「優免特權」然り）、またこの時期に大きな社會變容とそれに伴う人的流動化が顯著であつた以上、明末期における郷紳の擡頭を、氏の如く「人々」の側から説明することは整合的であるとも言えよう。支配・權力といった問題をそれが及ぶ客體の認知から読み解く斬新な試みについて、多くを語る資格を評者は有していない。この點をお斷りした上で、幾つかの疑問點を提示させていただくと、先ず郷紳自らによる「郷紳らしさ」を顯示する行動が擧げられる。この點に關連して岸本氏は、本書とは別の場で「そうした（身分上の……引用者）上下感覺は、服裝や物腰、呼稱や交際の禮など、様々な可視的シンボルを以て絶えず確認されていく必要がある⁽³⁾」と述べている。その概念がきわめて廣範かつ曖昧であつたイギリスのジェントルマンに比すれば、郷紳の存在は自他いづれの認識においてもかなり明瞭であつたと思われる。それでも尙、ジェントルマンの特權的スポーツであつた狩獵や、當初は彼らのステイタス・シンボルとして機能した砂糖入りの中國茶（喫茶）やインド木綿の着用品がそうであつたように、郷紳の郷紳たる「可視的シンボル」——岸本氏が擧げた右の事例の他、外出時の乗輿、それを擔がせる奴僕⁽⁴⁾の服裝など——によって、つまり郷紳の主體的行動によつても郷紳の勢力が維持・擴張されたと考えられる。かかる側面は、それを見せつけられる側の認知、あるいはそれを意識した側の行動と評價されようが、それと同時に郷紳側の自覺と實踐、つまり郷紳の屬性に關わる一面とも看做しうるのではあるまいか。

次に、なぜ人々は郷紳を勢力ある者と看做すのかという點に關わる「株式市場での投機」の喩えについてである。些かあげ足取り的

ではあるが、たとえ人々が郷紳を「有望株」と認定しても、それに投資できるだけの資力を持つ者は限られている。また資力は持たないが市場の株價に通じた者、あるいは株式の何たるかさえ知らぬ者等、人々の存在は實に多様であらう。そもそも何故に人々は他の株ではなく郷紳株を有望なものと認めたのか、という根本的な問いは氏の説明を以てしても、依然として残るのではなからうか。そこで更めて想起されるのが、科擧・教養に連なる郷紳の士大夫としての側面である。イギリスの事例においても、ジェントルマンたる重要條件として教育の比重が増し、十九世紀にはパブリック・スクールからオックスフォード・ケンブリッジ兩大學への進學が一般的コースとなつた。この教養を重要な一背景として、ジェントルマンは社會一般からの強い尊敬を集めていたと言われる。明清郷紳の場合にも、郷紳との間に直接的關係を結ぶ多くの人々の評價、別言すれば社會一般における郷紳評價に、中國社會に傳統的な尊敬の對象たる士大夫の側面に關わる基盤の存在したことを、いさ少し重視すべきなのではないかと評者は考えるのだが。

第二は、右に述べた郷紳理解にも關わる氏の基本的視座、いわゆる岸本社會史の特徴に關する問題である。更めて述べるまでもないが、いわゆる社會史が新たに切り拓いた分野、斬新な問題提起の數々は、我が國における歴史學に限定しても、多大な貢獻を果たしたと言える。現段階は、當初の目新しさやブームも一應終熄し、その批判者をも含め、研究者の關心は社會史の成果の總括と今後の展望へと注がれている。いま更めて社會史の特徴を簡潔に示せば、それは庶民・日常生活・女性へ關心を持ち、人と人とのつながり方（社

會的結合のあり方」を問う學問と言えようか。別言すれば、庶民の日常生活の實態や生活意識、人間關係のあり方を問うもので、そこに「等身大の歴史」とも呼ばれる所以がある。

既に本書を讀了された方はお氣づきの通り、岸本氏自らが社會史それ自體に言及した箇所はない。しかし本書の「序」でも明らかに、氏の問題關心が「社會の片隅の行爲者」「社會の片隅で選擇する個々の人々の行動」にあると同時に、人と人との結合のあり方を問うことを通じて中國社會を捉えようとする視座を持つ點から、氏のアプローチは紛れもなく社會史のそれであると言えよう。勿論、このようにジャンル分けできるとしても、その事自體にさほど意味があるとも思えない。岸本氏が社會史に關して特別に言及しなかったのも、氏の研究がどの範疇に屬すのかということより、具體的な問題關心・視座そのものを重要視したからと推測される。では、岸本社會史の特徴をどのように言い表わすことができるであろうか。本書において最も注目されたのは、明清王朝の交替という一大異變を核とする明末清初の政治的社會的激動期における一般庶民の認知と行動である。當該時期の江南社會に生きた「人々」を具體的對象に、大變動の渦中であつた彼らの發想・行爲から十六・十七世紀の中國社會像が巧みに描かれたのである。社會史との絡みで表現すれば、いわば非日常の中の日常が照射されたとも、また廣義の「心性史」とも評價できよう。しかし、本書で取りあげられた日常生活とは、例えばイギリス近世社會史研究が産業革命時期の庶民の日常生活を分析したが如き、衣食住に關わる庶民の生活實態についてのそれと異なる。岸本氏ご自身は衣食住に大きな興味を抱いておられると評者は諒解しているのだが、本書に關する限り、右に示した點

は岸本社會史の一つの特徴と言えらるであらう。

ところで、評者は本書に明瞭に提示された、いわば名もなき人々の日常的行動への着目に大いなる共感を覺えるものであるが、しかしその根源的共鳴とは別に、本書にある種の戸惑いを感じたこともまた事實である。それは、本書の各章において登場する「社會の片隅の行爲者」が、「同時代人」「明末清初の人々」「廣汎な人々」「廣汎な小農層」「廣汎な群衆」といった言葉に置き換えられる點である。最も頻繁に使用される「當時の人々」という名辭は、紛れもなく氏の分析視角を象徴するものである。それが「社會の片隅の行爲者」（傍點は評者、以下同じ）を意味するものである以上、氏の言う「人々」とは、素直に受けとめると、官僚・鄉紳・富裕層等を除外した、社會の底邊部に生きる名もなき人々をイメージさせる。從來の歴史學では、彼らのことを庶民、民衆、大衆あるいは人民等と呼び表わしてきたが、岸本氏がそれを敢えて「人々」と呼ぶ眞意はどこにあるのか。評者なりの理解を記せば、一つに氏の社會に對する理解が「社會の片隅で選擇する個々の人々の行動、その集合體が社會」（序Ⅷ）とする點にあり、かつ明末の社會變動によつて「バラバラで流動的な群衆」が析出されたとする氏の理解の中心に「個」としての人間がある。この點に重きを置けば、ある種のまとまりや階層性、時にイデオロギーをもイメージさせる庶民・大衆といった語はそぐわないと判斷したから、と推測される。また、第七章で取りあげられた姚廷遴の如き市井の下層士人に象徴されるように、氏の「人々」の概念には必ずしも庶民だけが包攝されるのではないから、とも推測される。以上の推測の當否は措くとして、これはあるいは讀者である我々が、その含意を汲み取るべき性格の問題

題と言えるかもしれない。しかし、「人々」は岸本社會史のキーワードであると同時に、きわめて伸縮性のある概念であるが故に、氏自らの説明が欲しいところだと感じたが、いかがであろうか。

さて、第三は、本書の分析の場となった江南社會に關する問題である。岸本氏にとって江南社會を分析對象とすることの積極的意義は、「秩序問題の實驗場」としての王朝交替下の江南社會⁽⁵⁾という點にある。「成熟したドロドロした社會」であった江南において、明清交替下、従来の秩序がどのように崩壊し、その後どう再形成されるかに氏の重大な問題關心の一端が存在する。周知の通り、従来の明清史研究が「先進地江南」を主舞臺として展開してきたこと、これに對して江南中心主義との批判が加えられるとともに、福建・四川・廣東・廣西・東北他、江南以外の地域に關する事例研究や非漢族研究が近年精力的に進められてきたことが知られよう。しかしながら、岸本氏をはじめ、現在江南を分析對象とする研究者に、言われる江南中心主義は認められない。同時に、江南研究者である岸本氏のスタンスは、きわめて慎重にはあるが、江南での「實驗データ」を踏まえつつ明清期中國社會一般へと普遍化を試みる志向性をも併せもつものである。そもそも歴史學における地域研究とは、ジグソーパズルの個々のピースとは全く異なる。廣大な中國の全地域の事例を周く組み合わせてはじめて全體像が浮かびあがるという類のものではない。選ばれたテーマ、選擇された地域におけるデータの汎用性と耐久性とが問われることになる。本書における江南社會とは、その「先進性」の故からではなく、中國社會ないし明末清初理解における普遍化への方向性をも見通しうる象徴的事例として

の位置づけ故に、岸本氏によって積極的に選び取られた具體的な場なのである。

では、本書に示された「實驗データ」の場合はいかがであろうか。いま本書の構成を更めて示せば、序を除き、前三篇が新たな明末清初像の提起および論争的問題を取りあげたもの、後四篇が實證的事例研究となっている。後者においてデータの汎用に關わる記述が見られるが、とくに評者が強い印象を與えられた第七章を例にあげれば、姚廷遴の生活に關する詳細な分析から得られた「選擇の幅が大きい」といった意味での「自由」さとそれに伴う不安定性、他面での人間關係の強さと多様さ」という特色は、「明代後期（一六世紀）以降の中國社會の特色として、かなり一般化できるように思われる」（いづれも二六九頁）と述べられる。明清王朝交替というエポック・メイキングな出來事を含む、中國史上屈指の大激動期であった明末清初期の江南社會における事例研究の成果を普遍化する方向性には、同時代の中國社會一般への途と、前後の時期とくに後代の中國社會一般への途とがあらう。後者の場合、それは中國史上における明末清初期の位置づけという大問題に連なるものとなる。明末清初という大變動期であるが故に社會の諸矛盾や日常的構造が顯在化するのだと見る見方と並んで、かかる側面を認めつつも、尙この時期の特異性に強い留保を加える見方も成り立ち得よう。勿論、これは兩者の何れかが正しいというものではなく、局面によってその分歧が生じると見るべきであらう。清代中期中國社會——新たな諸矛盾を加えつつも相對的な「安定期」であり、同時に十八世紀の意味をもつ變動期にあたる——における庶民の日常生活に關心を抱く評者の眼には、例えば明朝の崩壊、皇帝の自殺に伴う江南社會の

「パニック状態」下における人々の日常は、やはり特異なモデルとして映る。明末清初期と清代中期の異同、連続・非連続の問題は、依然として興味の盡きない問題と言えよう。

三

以上、評者の問題關心に響き合う諸點に關する些か偏った書評となったことをご寛恕いただきたい。

残された紙幅は僅かだが、最後に更めて指摘しておきたいことは、本書が岸本氏の前著を踏まえて、あるいは相互に共鳴しながら成り立つという點である。世界史および十六・十七・十八世紀史という廣い視野の下に解明された明清期中國の社會經濟的状況、この理解をベースに當時の中國を生きた人間の認知や行動にスポットが當てられた點に、本書の本質的價值の一斑があると思われる。いわゆる社會史一邊倒の方向性に非ざる、「經濟史と社會史のアンサンブル」⁽⁶⁾が肝要であることを我々は十分認識しておく必要があるであらう。

ところで、「序」をはじめとする氏の深い問いかけに觸發されてか、本書の讀後にはきまって「歴史學とは何を問う學問か?」⁽⁷⁾日本における外國史研究・中國史研究の意味は何か? という、舊くてもまた新しい問いが評者の腦裏に去來した。人類社會の現況、歴史學を取り巻く環境等を鑑みると、かかる問いは一層その強さを増すが、いわゆる社會史に對する根強い批判や岸本氏の方法論に關する一部の批判も、その根底には、右の問題に關わる研究者個々の認識つまり歴史觀の相違が横たわっている。この點に關して、氏が「序」において表わしたものの以上の言及を研究論文集たる本書に求

めることは望蜀に過ぎようが、他に例を見ない刺激的な「序」であるが故に、些か無理な注文もしてみたかった氣がする。

最後に、今後の明清史研究との關連で一言。ただでさえ數の限られる明清史研究者が、何もこぞって一定の方向を志向する必要はない、と評者は考える。研究の個別分散化の現狀、それに伴う論争の缺如、これらに對する批判の聲は明清史に限ったことではないし、評者もそれを無前提に是認するものではない。しかし少なくとも、積極的意義を有する新分野の開拓・新たな視座の導入による研究蓄積の豊富化への営みは、今後も切に求められ續けるのではあるまいか。かかる意味においてもまた、本書の貢獻は甚だ大きいと言えるであらう。

拙評が岸本氏の勞作の本質的意義をどの程度まで理解することに成功し、また卑見がどこまで本書の骨格に踏み込めているか、その判斷は、岸本氏ならびに讀者の方々に委ねる他はない。本書を手にしたことよって益々、岸本氏の今後の展開が楽しみになったというのが、「登壇」を終えての評者の偽らざる想いである。

註

- (1) 『東洋史研究』五〇巻四號、一九九二年に掲載されたJ・W・エシリック、M・B・ランキン編著“*Chinese Local Elites and Patterns of Dominance*” 1990に對する岸本氏の書評。

- (2) 評者の理解は、以下の文獻に負うところ大である。村岡健次・川北稔編著『イギリス近代史』ミネルヴァ書房、一九八

六年。川北稔『工業化の歴史的前提——帝國とジェントルマン——』岩波書店、一九八三年。平凡社版『世界大百科事典』の川北氏執筆による「ジェントルマン」の項、一九八八年。P・J・コーフィールド「イギリス・ジェントルマンの論争多き歴史」（松塚俊三・坂巻清譯）『思想』八七三號、一九九七年。

(3) 岸本美緒「明清時代の身分感覚」森正夫他編『明清時代史の基本問題』汲古書院、一九九七年、所收。

(4) 竹岡敬溫・川北稔編『社會史への途』有斐閣選書、一九九五年、參照。

(5) 岸本美緒「地域社會の視點と明清國家論」『舊中國におけ

る地域社會の特質』科研報告書（研究代表者、森正夫）、一九九四年、所收。「成熟したドロドロした社會」という表現も右による。

(6) 前掲註(4)書、所收の川北稔『殘餘の要因』から『全體史』へにおける表現。

(7) 例えば、『本郷』二五號、吉川弘文館、二〇〇〇年に掲載された永原慶二・尾藤正英兩氏の對談「二〇世紀の歴史學を振り返る」は、ネガティブな意味で大變興味深いものと言える。

一九九九年二月 東京 東京大學出版會

A五判 二八二頁 五六〇〇圓